

中国語を母語とする子どもに漢字指導する際の注意点と工夫 —小学校現場で作成した教材を含めて—

伊奈垣圭映（大阪市立野里小学校講師）

1. 実践の場の特徴

実践者は、東大阪市小学校と神戸市小学校の日本語指導の必要な子どもが多く在籍しているセンター校、大阪市小学校で主に中国語圏から渡日の子どもに日本語と母語指導してきた。その中で子ども達の「中国語がわかる」「既習の中国漢字」を強みに日本語指導（漢字）に取り組んできた。子ども達は、大人の期待にそって早く日本語を習得しようと中国語を使わないよう意識し、徐々に家庭でも中国語を話さなくなる。特に母国で中学年まで就学していた子どもでは、既習の中国漢字と常用漢字を混用し、音訓読みと同音異字の区別、熟語の使い方に戸惑い、テストや課題で中国漢字を書いて成績が取れない。そのことから母語への感情が希薄にならないよう心がけた。

2. 実践の目的

学校現場では、中国語圏から転入してきた子どもは、日本語の漢字学習が容易で特に困難はないと思われがちである。しかし、中国語の漢字には、簡体字と繁体字があり常用漢字と字形が異なるものも多くある。またその意味や使い方にも違いがある。実践では、逆に中国語と既習の中国漢字を保持しながら、常用漢字習得にプラス影響し相互の理解に効果を上げることをめざした。

3. 具体的な実践の内容とその過程

小学校で習う 1006 字のうち簡体字とちがいがあある常用漢字は 532 字あり半数を超える。繁体字とちがいがあある常用漢字は、472 字である。点や些細なちがいもあれば、字形が全く異なるものもある。しかし、字源は同じなので、それぞれの成り立ちを知ることで母語の文字を保持しながら、常用漢字を覚えていけるようにした。

3.1. 簡体字の成り立ちの 5 つのパターンと繁体字や常用漢字とのつながりを示す。

中国の簡体字は、おおよそ次のような 5 つのパターンで簡略化された。その逆から常用漢字を学習するようにする（伊奈垣 2015）。

① ひらがなのように、草書体からくずして書かれてできたもの。

例えば：馬→馬 長→長 书→書 车→車

② カタカナのように、元の漢字の一部を残したもの。

例えば：开→開 电→電 习→習 飞→飛

③ へんやつくりを簡単にしたもの

例えば：语→語 观→觀 际→際 验→験

④ 意味や音から作りだされたもの

例えば：护→護 态→態 运→運 华→華

⑤音を借りて置き換えられたりまとめられたりしたもの

例えば：远→遠 袁は元に置き換えられていて、园→園となる。

职→職 職のつくりは只に置き換えられていて、识→識、织→織となる。

义→義 義は义になり、议→議、仪→儀となる。

*例外として、日本の国字があることも話しておく。

中国からの子どもは、簡体字の成り立ちの分類を話し、そのパターンから常用漢字を覚えることができる。台湾・香港等繁体字圏の子どもには、常用漢字の方が簡略化されていることがあるので、日本の漢字を見て喜んで覚える。

3.2.常用漢字を中国語で読ませ（読んで聞かせ）、中国読みから音読みを分かる事を知らせる。

3.3 熟語も中国語で読ませて、読みと意味、文字を理解させ同音異字を区別させる。

日本の熟語には、同じ音なのに漢字が異なるものがある。それを中国語の音から区別することができる。

例えば、「しゅうしゅう」は「収集」または「集収」か。中国語では「shōu jí」と読み、音が全く異なるので漢字を間違えずに書くことができる。「ほうもん」は「訪問」または「訪門」か。中国語では「問→wèn」「門→mén」と全く異なる。

3.4.常用漢字を基準に中国の簡体字と繁体字の漢字対照表を教材として作成した。

中国から転入の6年生の子が、国語の教科書で「衛生」に出合いなかなか意味が分からなかった。そこで、対照表から「衛→卫」であると知り大きく頷いて「卫生」から意味を理解できた。同時に日本語ではどちらも「えいせい」である、「衛生 (wèi shēng)」と「衛星 (wèi xīng)」の区別もつけることができた。

4.結果と考察

日中漢字のちがいに戸惑う子ども達が、「中国語がわかる」を利点とし日本語は既習知識をもとに学習することができると自信につながった。そのことにより、教科学習意欲につながることができた。中国語保持にもなった。学校で中国語での問いかけにも日本語で応えていた渡日三年目の子が、「中国語を勉強したい。」と言い、日本語作文にも積極的に取り組むようになりコンクールで賞を取った。漢字の成り立ちやちがいを理解することで、漢字検定挑戦への意欲にもつながった。課題として、日本語指導と同時に母語（中国語）指導をしていかななくては、子ども達は短い間に母語を忘れてしまう。特に読み書きができなくなるので、中国語の絵本を読ませたり、日記を書かせたりしている。また、時間が許す限り中国の地歴も教えている。

行政によっては、母語サポーター派遣があり支援を求めることができる。しかし、時間的に制約があり、散在地ではサポーターさえ望めない。中国語が分からない指導者にも同様の効果が得られる教材が必要と考え、今後の教材開発の課題としたい。

<引用文献>

伊奈垣圭映/編（2015年）『ちがいがわかる対照表 日本の漢字 中国の漢字』水山産業出版部